

草加市立病院の産科休診 1年

草加市立病院の産科が休診して1年が過ぎた。同市内で出産できる施設は、現在診療所が1院、助産院が2院。出産の場が少なくなったことで、妊婦の多くは、市外に出てお産をする「出産難民」になっている。05年3

月の休診以来、再開を願う市民の要望は強く、病院も医師確保に奔走しているものの、再開のメドは立っていない。(木村尚貴)

「出産難民」いつまで

草加市の主婦山崎麻里(33)は今夏にも第2子を出産予定だ。第1子は知人の勧めで自宅から1時間近くかかる東京・お茶の水の病院で出産した。「電車での長距離移動はつらかった。車で15分ほどでいける市立病院での出産を考えましたが……」と話す。結局、前回と同じ病院で産むことにした。

毎月60〜70件

市立病院の産科は、05年3月に診察をやめた。04年12月、5人いた医師の1人が退職。翌年1月、別の医師が病気で長期休暇を取った。月の出産は60〜70件。病院は泊まり勤務の負担も大きく、安全な医療ができない」として休診を発表した。残る医師も6月までに辞め、産科医はゼロになった。

同市の会社員阿部仁子(34)は第1子を市立病院で産んだ。出産前に抱いていた公立病院の印象と違っていたという。「医師はとても親切だった。助産師さんも妊娠中の栄養相談や母乳育児の相談まで丁寧フォローしてくれた。2人目も市立病院で、と考えていた時に休診になった。

医師メド立たず「家から1時間」緊急時不安

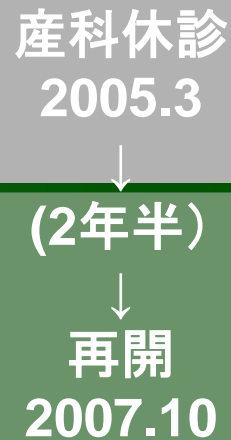
助産師は「近くに市立病院があるのだから、早く再開して急患を受け入れてほしい」と願う。

都内の病院などと提携。実際、緊急時は30分以内で搬送可能なため、今のところ市立病院の産科がなくなった影響は少ないという。ただ、ある助産師は「近くに市立病院があるのだから、早く再開して急患を受け入れてほしい」と願う。

背景には激務
出産ができる県内の病院は約30あるが、ここ数年、年々近くなるような激務に辞めてしまつて話していた。



産科の病室。休診後も、再開に備えて病室のシーツは定期的に新しいものにかえられる＝草加市立病院で



助産院で自然出産をしたいという人は増えている。でも、助産院は治療ができず、中核病院がなければ、助産院も妊婦も不安だ。(小田切房子; 埼玉県助産師会)

朝日新聞
2006.6.1